

PROGRAM NOTES

曲目解説：寺西基之

メンデルスゾーン：交響曲第4番 イ長調 Op.90「イタリア」

フェリックス・メンデルスゾーン(1809-47)は幼時から恵まれた教育を受けたこともあって早くから楽才を発揮し、すでに10代で多くの傑作を生み出して、ドイツで作曲家としてその名が知られるようになった。そして見聞をさらに広めるため1829年にイギリスを旅し、続いて21歳となった1830年に改めてヨーロッパ大旅行に出発する。この旅行はドイツ国内から、オーストリア、イタリア、スイス、フランス、そしてロンドン再訪を含む実に足掛け3年にわたる旅となるのだが、そのうちイタリアへは1830年の秋に入り、北イタリアを訪れた後、11月1日から翌年4月までローマに滞在した。このローマ逗留中に着手されたのが「イタリア」交響曲である。前年のイギリス旅行中にスコットランドで構想した「スコットランド」交響曲がその後進展をみていなかったのに対し、「イタリア」交響曲はこのローマ滞在中に筆が進んで大体の形が出来上がるが、この時は完成をみるまでには至らなかった。しかし大旅行を終えてベルリンに戻った後の1833年初めに作曲を再開し(1832年晩秋にロンドンのフィルハーモニック協会から交響曲委嘱を受けたのがそのきっかけとなった)、3月13日に全曲が完成される。1833年5月13日、ロンドンでメンデルスゾーン自身の指揮で行なわれた初演は大成功だったという。

作品は均衡のとれた明快な造型による古典的なスタイルのうちにロマン的な情感を息づかせるという、まさにメンデルスゾーンらしい魅力を放つ傑作となっている。とりわけ明朗なカンタービレの美しさと躍動感溢れるリズムをとおして、燦々と陽光輝くイタリアの光景と人々の生活の情景を絵画的に浮かび上がらせる手法はいかにもメンデルスゾーンならではの美質といえるだろう。ただ彼自身は作品の出来に不満を感じ、1834年には大幅な改訂に乗り出している。しかし結局この改訂は仕上げられないままになり、そのため彼の存命中にこの交響曲は出版されなかった。やっと彼の死から4年後の1851年に初演稿に基づく初版が出版され、以後この作品は初演稿によって演奏されてきた。近年改訂稿のほうも楽譜が出されたが、これはあくまで改訂途中の段階のものであるため、演奏される機会は少なく、本日も初演稿に基づく従来の版で演奏される。

第1楽章(アレグロ・ヴィヴァーチェ)は木管の刻みの上で歌われるヴァイオリンの第1主題に始まる。いかにも南国の陽光を思わせる明朗な主題だ。展開部では躍動的な新主題も登場してフガートが発展、大きな頂点を作り上げる。この新主題は再現部にも現れる。

第2楽章(アンダンテ・コン・モート)はどこか巡礼の行進を思わせる厳肅な雰囲気を含んだ二短調の楽章で、主題はバロック風の趣がある。光が射してくるような長調のエピソードが2度挟まれる。

第3楽章(コン・モート・モデラート)は優美なメヌエット風の楽章だが、どこか夢想的なロマン性をはらんでいるところがメンデルスゾーンらしい。トリオではホルンとファゴットの呼びかけが牧歌風の気分をもたらす。

第4楽章(サルタレッロ、プレスト)はイタリアの民俗舞曲サルタレッロの性格を生かした急速なイ短調のフィナーレ。途中からは同じく民俗舞曲タランテッラの性格を持つ主題をフガートで織り込んで、興奮を高めていき、最後も短調のままで全曲を閉じる。

ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第3番 ニ短調 Op.30

ロシアの作曲家であるとともに大ピアニストでもあったセルгей・ラフマニノフ(1873-1943)は1904年、政情不安のロシアを離れてドレスデンに移り住んだ。ドレスデンでは作曲に力を入れ、交響曲第2番や交響詩「死の島」などの作品を生み出すが、そうした創作意欲の高まりは1909年にモスクワに戻ってから続く。

ピアノ協奏曲第3番もドレスデン時代に構想された作品で、帰国後に本格的に作曲が進められた。1909年秋から翌年初めにかけて予定されていたアメリカへの演奏旅行での自作自演用の新作として筆が進められ、出立前の9月にひととおり完成をみている。その後アメリカへの旅行中に手直しされ、1909年11月28日ニューヨークでラフマニノフのピアノで初演された。

作風は前作のピアノ協奏曲第2番を受け継ぎ、名技的な鮮やかさとロシア的な叙情を結び付けたスタイルをとるが、独奏パートの技巧的な難度の点で第2番を上回り、古今のピアノ協奏曲の中でも最も難しい作品のひとつに数えられる。管弦楽パートもきわめてシンフォニックで、ラフマニノフの書法の熟達ぶりが示されている。

全体の構築法もきわめて綿密で、第1楽章の第1主題が全曲の循環主題となり、そこから派生した様々な楽想が全曲にわたって用いられているほか、第1楽章第2主題も終楽章で回帰し、第2、3楽章の主要主題も第1楽章の主題と関わりがあるなど、作品全体が第1楽章の主要な主題と動機に関連付けられ、全曲がきわめて有機的な統一体を形成している。にもかかわらずきわめてラプソディックな奔放さで超絶的な名手が気分赴くままに楽想を発展していくような印象を聴く者に与えるところがいかにもラフマニノフらしい。

第1楽章(アレグロ・マ・ノン・タント)はピアノが両手のユニゾンでシンプルに提示する第1主題に始まるが、前述のようにこれは全曲の循環主題となる。作曲者は否定しているものの、この主題はキーウの聖歌「ああ救世主よ、汝の棺を番兵が守る」に基づくといわれている。第2主題はまず弦に軽快に現れ(それに先立って管楽器に示唆されている)、続いてピアノのたっぷりしたカンタービレで繰り返される。第1主題冒頭の再帰(やはり独奏の両手ユニゾン)に始まる展開部は第1主題の素材が様々に扱われ、カデンツァ(作曲家自身2種類残している)へ至る。その途中でピアノ独奏を背景に管楽器がソロで第1主題を受け継いでいく部分が現れるが、その後カデンツァがさらに続いて第2主題が情感豊かに扱われる。その後第1主題が曲頭と全く同じ形で再現され、第2主題の動機を伴う短いコードで終る。

第2楽章(間奏曲、アダージョ)は幻想的な雰囲気漂う長調の緩徐楽章。オーボエの示す暗いメランコリックな主題を弦が受け継いだ後、ピアノが錯綜した響きで登場し、主題を濃密に変奏していく。やがてテンポを速めた軽快なエピソードとなるが、ここには循環主題(第1楽章第1主題)の変形がクラリネットに現れる。この部分は短く、再び主題の変奏が続き、最後はピアノのカデンツァ風の華麗なパッセージを伴う経過部分を経て次の楽章に移る。

第3楽章(フィナーレ、アツラ・ブレーヴェ)はピアノのダイナミックな第1主題で始まる。行進曲調の楽想やシンコペーションの和音で上下行する楽想を経て、叙情的な広がりを見せる第2主題が出現、展開部では第1楽章の2つの主題が様々な形で活用される。コードでは第2主題が広大に再現され、最後は圧倒的な興奮のうちに閉じられる。